

# 船橋市社会科セミナー通信 第200号

## 1本目: ひさしがいに ごあいさつします

船橋市社会科セミナー会長: 池田義光

昨年1月に社会科セミナー勉強会を開催して以来、この1年8か月余り、開催できていませんが、皆さまいかがお過ごしでしょうか?昨年3月開催予定の社会科セミナー勉強会を中止した時には、コロナ禍がこんなにも長く続くとは思っていませんでした。会員のほとんどの皆さんは首都圏にお住まいなので、より一層大変な思いをされているとは思いますが、こんな田舎の長野県安曇野でもそれなりに大変です。私は、今、安曇野市の公民館記者をやっているのですが、その会議と取材だけは月に2~3回だけ参加しておりますが、それ以外の趣味で参加している歴史や古文書関係の会合は、ここ数か月すべて不参加です。大好きな歌声喫茶は、会さえ開かれておりません。悲しいかな、映画も全く観に行っておりません。外食も全くしていません。そんな悲惨な状況下でも、健康維持のための散歩とジム通いと週一テニスは何とか続けております。

この状況では、コロナ禍もいつまで続くか分からないので、社会科セミナー勉強会は開催できなくても、せめてセミナー通信だけは会員の皆様にお届けしたいと考えるようになりました。そこで、今回は、何人かの会員の方の近況のお知らせと、先日知った感動的な歴史秘話をお届けします。

## 2本目: セミナー会員の近況から

池田義光

### (1) 皆川征夫先生がご退官です!

本セミナー名誉会長で、K市教育長の皆川征夫先生が、任期満了による退官を迎えられました。皆川先生の最後の2年間は、コロナ禍のために大変ご苦労されたことと思いますが、先生は、コロナ感染対策を工夫しながら、学校はなるべく休みにしないで、子どもたちに学校での充実した活動をできるだけさせてあげられるように、支援されたそうです。こんな教育長さんで良かったとつくづく思います。長年のご活躍本当にお疲れさまでした。

また、本セミナー毎年恒例の皆川先生の講演会が、コロナ禍のために去年と今年と2年連続で中止になり大変残念な思いをしました。来年こそは、皆川征夫先生の講演会が実施できますように、願っております。

### (2) 長研に行っていた須釜昇平先生が、研究を終えられて、戻っておられます

昨年度の須釜先生の長期研修は、あいにくのコロナ禍で思うように進められず、大変ご苦労されたようですが、なんとか検証授業や研究報告書作成などを完了され、研究を終えられました。須釜先生の研究テーマは『地理的分野における社会参画意識を育む授業づくり~当事者として身近な地域の在り方を構想し、提案する実践を通して~』でした。今後、多くの機会でご発表・報告されること、そして船橋の社会科実践に寄与されることを期待いたします。

### (3) 千葉大附属小の中谷佳子先生がオンラインで授業公開

千葉大学教育学部附属小学校に勤務している中谷佳子先生が7月17日に開催された『令和3年度千葉大学教育学部附属小学校・オンライン公開研究会』で授業を公開されました。

中谷先生は、千葉大学教育学部附属小学校で着実に実践を積み重ねているようで大変嬉しく思います。その成果を是非とも船橋の社会科にも還元していただければ幸いです。

会員の皆様で、セミナー通信用に近況を発表して下さる方は、池田宛てにショートメール(090 2313 2569)でお知らせください。なお、池田宛のパソコンメールは [ikeyoshi.24@gmail.com](mailto:ikeyoshi.24@gmail.com)

## 3本目：歴史豆知識 12

池田義光

このコーナーのタイトルは今までの「日本史豆知識」でしたが、実際には度々日本史以外の世界史に関わるものも採りあげていますので、今回から「歴史豆知識」に変更して、通し番号はそのまま追加させていただくことにします。

第12回の今回は、妻に教えてもらったテレビ番組をもとに「感動秘話」を紹介します。

### 感動秘話：

## 100年前のポーランド孤児救済、手を差し伸べたのは日本のみ！

妻から「こんなテレビ番組があって感動した」と教えてもらいました。

第29回 FNS ドキュメンタリー大賞：

《 手を差し伸べたのは日本のみ…

歴史に埋もれた知られざる“ポーランド孤児”救出の軌跡 》

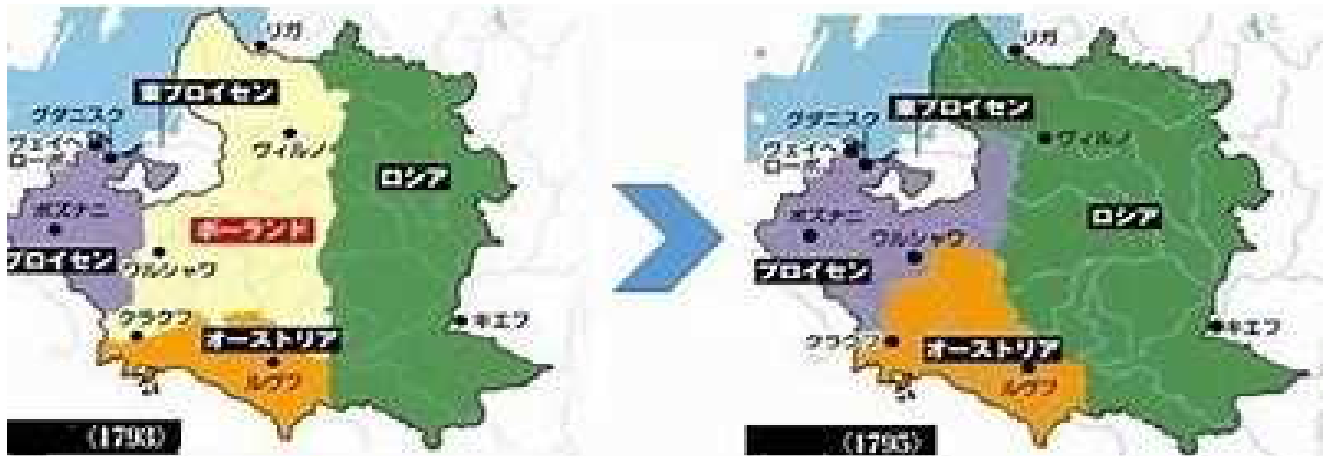
以下は、その番組を元に、ネットなどの様々な資料を参考にして、私が構成し直して、紹介します

## 1 ポーランド孤児救済のエピソード

### (1) シベリアに渡ったポーランド人の苦境

ロシアのシベリア地域は冬には零下40度にもなる極寒の地域です。今から100年ほど前、シベリア地域に、ポーランドから渡ってきた15万～20万の人々が住んで寒さに耐えながら苦役や開拓に従事して厳しく苦しい生活を送っていました。

<なぜシベリアにたくさんのポーランド人がいたのか>



地図を見ればわかりますが、ポーランドは、ロシア、ドイツ(プロイセン)、オーストリアというヨーロッパの3強国に囲まれた国です。そのポーランドが、1772年、1793年、1795年と3回に渡って周辺3国によって分割され、遂には国家自体が消滅してしまいました。

このうちロシア領とされたポーランドの人々は何度もロシアに叛乱を起こし、独立のために立ち上がったのですが、いずれも鎮圧され、反攻したポーランド人とその家族は次々にシベリア流刑され、流刑先で重労働を課されたのです。第一次世界大戦までにその数は5万人余りに上ったといわれます。

さらに第一次世界大戦ではポーランドはドイツ軍とロシア軍が戦う戦場となり、両軍に追い立てられて流民となった人々がシベリアに流れ込んでいきました。そのためシベリアにいるポーランド人の数は15万人から20万人にまで膨れあがっていたのです。

## (2) 戦火に逃げ惑うシベリアのポーランド人

1918年に第一次世界大戦が終結してようやくポーランドは独立を回復しました。

しかし同じ1918年にロシア革命が起こった結果、社会主義国家建設を目指す革命軍と反革命軍が戦い、ロシア全土に激しい内乱が起きました。この戦火の中で、シベリアのポーランド人たちは、祖国へ帰るどころか、凄惨な生き地獄に追い込まれます。食料も医薬品もない中で、多くの人々が極寒のシベリアの荒野をさまよひ、餓死・病死・凍死に見舞われていきました。わずかに手に入れた食べ物を先に子供たちに食べさせた母親が遂に力尽いて倒れ、母の胸にすがって涙を流しながら死にゆく子供たち…。そんな光景があらちこちで見られました。避難民たちは寒さと飢えで次々と死んでいったのです。生き残った孤児ハリーナさんの証言では、「車両には私たち家族3人だけでした。他の人は1人ずつ死んでいったのです。私たちは服を着ていなかったので、母親は死体から服を脱がせました。服のシラミをこすり落して外に干し、まだ残っているシラミを寒さで凍らせました。その服を私たちに着せたのです」。シベリアのポーランド人はそういう悲惨な状況で逃げまどい生死をさまよったのです。

## (3) シベリアのポーランド人の救出を求めて

1919年には、あまりに悲劇的な状況を見るに見かねたシベリア・ウラジオストク在住のポーランド人たちが立ち上がり、「ポーランド救済委員会」を設立しました。せめて親を失った孤児だけでも救われねば。彼らの未来をつなぎたい。

その時、シベリアには、資本主義国のアメリカ・イギリス・フランス・イタリア・日本が、シベリアのチェコスロバキア軍救援を名目に、実は社会主義革命干渉のために、共同出兵していました(「シベリア出兵」：日本は1918～1922)。「ポーランド救済委員会」はこのシベリア出兵している国々に孤児たちをシベリアから脱出させてくれることを頼んだのです。しかし、アメリカをはじめ欧米諸国は、戦火の中から孤児たちを救出することは困難であるとして、どの国も拒否し、帰国してしまったのです。

## (4) 最後の頼みの綱は日本だった

アメリカ・イギリス・フランス・イタリアに断られた「ポーランド救済委員会」が最後の頼みの綱と



してすがったのが日本でした。

列国のシベリア派兵規模は、米軍約8千人、英軍1500人、伊軍1400人、日本はこれらをはるかに上回る7万3千人でした。日本軍は、1918年8月に日本海側のウラジオストクに上陸した後、東は北樺太、西は9月にハバロフスクに進出した後、シベリア鉄道沿いにチタからバイカル湖のあるイルクーツクまで進出していました。列強干渉軍は、ロシアの反革命軍（白軍）らと共に革命軍・ボルシェビキ勢力と各地で戦闘を繰り広げましたが1918年11月に第一次世界大戦が終わると、その後順次各国軍が撤収しました。そんな中で、日本軍は撤収せず極東地域に留まって戦い続けていたのです。

苦境に立ったポーランド孤児の救出懇願を受けた日本政府は、日本赤十字社に救済を要請しました。日本赤十字社はわずか17日後には手を差し伸べる決断を下したのです。

戦火の中から孤児たちを救出するのは、軍隊でなければできないことでした。それをシベリアに派遣されていた日本軍が行ったのです。そうして戦火の中から孤児たちと付き添いの大人が救出されました。ポーランド孤児から見れば、東洋の日本という国は馴染みがなく、それだけ不安も募りました。しかし孤児たちの証言では、日本の兵隊さんたちはやさしかったそうです。

## (5) 日本に送られたポーランド孤児たち

### ① 船で日本へ送られた孤児たち

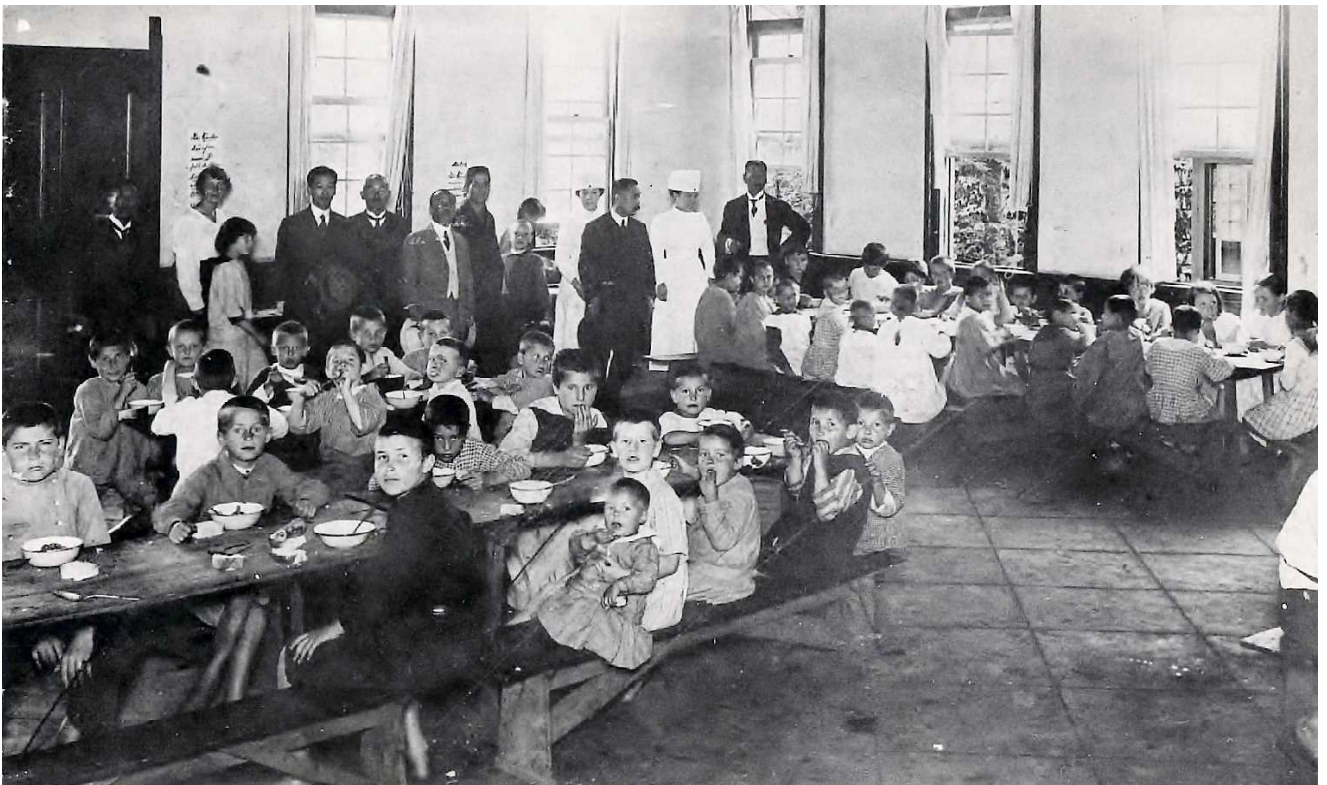
シベリアで救出された孤児と付き添いの大人は一端日本に送られました。

1920(大正9)年7月、ロシアのウラジオストクから第一陣が敦賀港に入港すると、以後1922年までに数回に分けて計765名に及ぶポーランド孤児たちと65人のポーランド人の大人が救出されたのです。もし救出されなかったら、ほとんどの人々は命を失ったはずなのです。

### ② 孤児たちの日本での日々



シベリアで撮影されたポーランド孤児たち



食事を採るポーランド孤児たち。丸刈りはシラミ採りのため

日本に着いた孤児たちはひどい栄養失調で、身体も弱っていました。そのうえシベリアで感染した腸チフスが猛威を振るいましたが、東京と大坂の日本赤十字社と協力施設で食事の世話や手厚い治療と看護を受けて、回復していきました。日本国民から寄付やおもちゃや人形・お菓子など子供が喜びそうな品々を贈る人が後を立たず、歯の治療や理髪、音楽団の演奏などボランティアを申し出る人が相次いだといえます。

孤児たちに同情し、日本では政府も民間でも国を挙げて温かく迎えました。東京でも大阪でも慰問品や寄贈金が次々と寄せられ、慰安会も何度も行なわれました。

大正天皇の皇后、貞明皇后ていめいがご訪問されたこともあります。皇后が、孤児たちに優しく語りかけ、親のぬくもりを忘れて久しい孤児たちを優しく抱きしめました。或る少女は後にこう述べています。

「どんなに優しくされても心細くてたまらなかった時、孤児収容所を訪問された貞明皇后に抱きしめてもらったことが今でも忘れない」。

このような国を挙げての温かいもてなしや献身的な看護の甲斐あって、来日当初は飢えて体力も衰えていた孤児たちは、みるみるうちに元気を取り戻し帰れるようになりました。



## ②孤児たちのポーランド帰国

ポーランド帰国のために横浜港や神戸港から出航する時、若い孤児たちは親身に世話をしてくれた日本人の看護婦や保母たちとの別れを悲しみ、乗船を泣いて嫌がるほどでした。苦難に満ちたシベリアでの生活を過ごした孤児たちにとって、これほどまでに温かく親切にされたのは、物心ついてから初めてということも多かったのでしょう。彼らは口々に「アリガト」など、覚えたての日本語を連発し、「君が代」などを歌って感謝の気持ちを表わしました。帰る子供たちも、大勢の見送りの日本人たちも、涙を流しながら、姿が見えなくなるまで手を振り続けたのでした。

## 2 母国に帰ったポーランド孤児の後日談

ポーランドに帰った人々は、日本人に対する感謝を子どもや孫たちの代にも語り継いで今日にいたっているそうです。

### (1)ポーランド帰国後の孤児たち

孤児たちはめでたくポーランドに帰国できたのですが、ポーランドに戻った彼らには身寄りがなく、母国語も満足に話せない子供もいたので、そのままにはできません。「ポーランド救済委員会」の会長を務めたアンナ・ビェルケヴィチは、バルト海のほとりにある施設に孤児たちを集めました。そこではポーランド語を学ぶとともに、「日本への感謝を忘れるな」を合言葉に、日本で覚えた歌なども歌い継がれていきました。

やがて成長した孤児たちは「極東青年会」を設立しました。会長には大阪で収容された孤児の、イェジ・ストシャウコフスキが就任し、同会は1930年代後半には、会員数が640人を超えました。彼らは相互扶助や親睦活動の他、自らの体験を踏まえて孤児院を開設しました。さらにポーランドの日本大使館と交流し、日本との親善を深めました。そして月給の一部を積み立て、「いつか日本に旅行したい」と夢見ていたといえます。

### (2)ナチス・ドイツのポーランド侵攻時にも孤児たちを守った

しかし帰国から17年後、彼らを再び戦禍が襲いました。1939年、ヒトラーのドイツ軍によるポーランド侵攻です。第二次世界大戦の始まりでした。

ドイツ軍の侵攻に抵抗する中、2週間余りのちにはソ連軍もポーランドに侵攻してきました。実はドイツとソ連は、ポーランドを分割する密約を結んでいたのです。さすがにこれではポーランドも抗しきれず、首都ワルシャワは陥落し、ポーランド政府は国外に脱出しました。成長した孤児たちは、またも



や国家が消滅する悲劇を、目の当たりにすることになりました。

そうした中、ワルシャワでは、「極東青年会」が開設した孤児院を守るために、ポーランドの日本大使館員たちが一役買います。孤児院にナチスの秘密警察が踏み込んでくると、その度に日本大使館員が駆けつけ、「この子たちは私たちが面倒をみており、身元は保証する」と語り、「さあ、みんな、ドイツの人たちに日本の歌を聴かせてあげて」とうながして「君が代」などを合唱させました。同盟国日本の国歌を歌われては秘密警察も何も言えず、引き上げたといえます。極東青年会の元孤児たちが、日頃から孤児院の子供たちに、日本の歌を伝えていたことが功を奏したのです。

しかしワルシャワの日本大使館は、1941年には閉鎖されてしまいました。

### (3) 何よりの恩返し：ヤルタ秘密協定の極秘情報を知らせてくれた

第二次世界大戦でポーランドはドイツを敵とする連合国側、日本はドイツと同盟を結ぶ枢軸国側で、敵対関係にありました。しかしポーランドの人々に日本に対する悪感情はありませんでした。それは日本も同じで、スウェーデンのストックホルム駐在武官であった陸軍のおの でのらまこと小野寺信は、ポーランドの情報士官ミハール・リビコフスキーをナチス・ドイツの手から守るため、日本のパスポートを与えて、武官室にかくまっていました。1944年には、ドイツの圧力に屈したスウェーデンの命令で、リビコフスキーはやむなくロンドンの亡命ポーランド政府のもとに退去します。

翌1945年2月半ば、小野寺のもとに亡命ポーランド政府から極秘に書簡が届きました。その内容は驚くべきもので、2月初旬にクリミア半島のヤルタで行われた米英ソ巨頭会談（ヤルタ会談）の詳細です。「ヤルタ会談で対日密約が結ばれ、ドイツ降伏の3ヵ月後にソ連が対日戦に参戦すること、その見返りとして日本領南樺太と千島列島がソ連に引き渡されることが決まった」というものでした。これは米英ソの秘密協定の中身で、日本にとっては決定的な重大情報でした。連合軍に加えて、日ソ中立条約を破ってソ連が参戦してくれば、日本の敗北は決定的であり、ポーランドと同様に祖国の地を奪われる危険が迫っていたのです。

連合軍のトップシークレットであるはずの極秘情報を、なぜ亡命ポーランド政府は小野寺に知らせたのでしょうか。それは「今度は私たちポーランドが日本を救う」というメッセージでした。「かつてシベリアの孤児たちを救い、この度もリビコフスキーを庇護してくれたわが友日本が、自分たちのような悲劇に陥らないでほしい。この情報をもとに何とか手を打ってくれ」という思いが込められていたのです。小野寺はすぐに日本へこの重大な極秘情報を伝えました。しかしそれはなぜか軍上層部に握り潰され、情報は活かされませんでした。これを活かしていれば、日本はソ連の仲介による太平洋戦争終結をあきらめ、もっと早くアメリカとの直接交渉による戦争終結に向かったはずです。そうすれば、沖縄戦の悲劇も、広島・長崎の原爆も、ソ連参戦後の満州での悲劇も中国残留孤児の苦しみやシベリア送還も、そして北方領土を奪われることもなかったはずなのです。なぜそうしなかったのでしょうか。この貴重な情報を握りつぶした者たちの責任は許しがたいのです。

### (4) 冷戦を経て

第二次世界大戦後のポーランドは、ソ連の影響下で東側の社会主義陣営に入っていたので、ポーランドの元孤児たちにとって、西側資本主義陣営の日本との交流はできず、日本に行きたいという夢をかなえることはできませんでした。

しかし、1989年12月マルタ会談による冷戦終了により状況は変わりました。

#### ① 阪神・淡路大震災被災児童の招待

1995年（平成7年）に日本で阪神・淡路大震災が起きた際に、95年と96年の2度、日本の被災児童がポーランドに招待されたのです。ポーランドは日本の被災児を自国に招くなどして傷ついた子供の心を癒す助けを行ってくれています。そして、その場に4名の元孤児もかけつけて、日本の子供たちに温かい言葉をかけてくれています。「私たちがかつて日本人からもらった温かな心を、今、被災して悲しんでいる日本の子供たちに伝えたい」という思いからでした。

#### ② 元孤児をワルシャワ大使館に招待

また 1995 年 10 月には、8 人の元孤児が、ワルシャワの日本国大使公邸に招かれました。全員 80 歳以上の高齢者です。大使が「国際法では大使館と大使公邸は、小さな日本の領土です」と挨拶すると、元孤児たちは「ああ、私たちは日本に戻ったんだ」と感激し、ひざまずいて泣き崩れたといっています。そして、ある元孤児はこう言いました。「私は、生きていた間にもう一度日本に行くことが、生涯の夢でした。そして日本の方々に、直接お礼が言いたかった。しかし、それはもうかなえられません。ところが今日、大使公邸にお招き頂き、この地が小さな日本の領土だと聞きました。それならば、ここで日本の方に、長年の感謝の気持ちをお伝えできれば、もう死んでも思い残すことはありません」

### ③天皇皇后陛下のレセプションへ元孤児を招待

2002 年（平成 14 年）7 月 12 日、ワルシャワの日本国大使公邸でレセプションが行われました。ポーランドへ公式訪問に臨まれていた天皇皇后両陛下（現在のの上皇上皇后両陛下）の、歓迎に対する答礼の会が催されたのです。公邸にはポーランド大統領夫妻をはじめ、関係者数百人が招かれていましたが、招待客は不思議な光景を目にすることになります。天皇皇后両陛下は大広間に入られると、メインゲストの大統領夫妻に挨拶される前に、まっすぐ 3 人の老人たちの元に歩み寄られたのです。その 3 人の老人こそ、かつての孤児たちでした。そのうちのヴァツワフ・ダニレヴィッチ氏 91 歳は大阪に收容され、天王寺動物園で喜んだ一人。ハリーナ・ノヴィツカ女史 92 歳は東京の日赤病院で、貞明皇后に拝謁した一人です。そしてアントニナ・リロ女史 86 歳は東京で、皮膚病で幼い頭を包帯でぐるぐる巻きにされながら、看護婦さんにとっても可愛がってもらったことをよく覚えています。天皇皇后両陛下は 3 人にお言葉をかけられました。「お元気でしたか」。天皇皇后両陛下と元孤児たちは、頬を近づけるほどの距離で、ひと言ひと言、しっかりと対話します。孤児たちは感激し、口々に日本への感謝の念を伝えようとしますが、思いがあふれるあまり、言葉に詰まりました。それでも亡くなった孤児の分まで、皆を代表するつもりで「本当にありがとうございました」と万感を込めて言う 3 人を、両陛下は感動の面持ちで受け止められたといっています。そんな 3 人の元孤児も、それから数年のうちに他界しました。



### (5) 現代にまで大切に語り継がれていること

シベリアから救出された孤児たちに始まるポーランドと日本との関係を、現在のほとんどの日本人は知らないかもしれません。しかし、このエピソードから私たちは、様々な大切なことを受け取ることができるでしょう。その一つは「善意は善意を生み、信頼は信頼を呼ぶ」という事実かもしれません。

1993 年（平成 5 年）から 4 年間、ポーランド大使を勤めた兵藤長雄氏はポーランドに住むようになると「なぜポーランド人は日本人に親切なのだろう」「どうしてこんなに親日的なのか」と思うことが多かったといっています。初対面でも、こちらが日本人だとわかったとたんに親近感を表し、好意的になるという体験を何度もしました。そしてこれには日本人が忘れていてポーランド人が覚えていた、ポーランド孤児の救出などの歴史的出来事があったからでした。

ポーランドでは、シベリアのポーランド孤児の救出・救済が現代にまで大切に語り継がれていることも、日本人は知っておきたいところです。だからこそ、ヨーロッパから遠い日本で起きた震災や原発事故を、ポーランド人が心から案じてくれるのでしょう。

現在では生存しているポーランドのシベリア孤児の方はおりませんが、その歴史の影響でポーランドは親日の国であり、両国の善意の連鎖はこの後も続くことを願ってやみません。

# 4本目：『池さんの歴史エッセイ』を執筆中です

池田義光

私は今歴史エッセイを書き溜めています。今までに下の14編を書きました。いずれこれらを出版のために出版社に持ち込もうと考えています。

## 『池さんの歴史エッセイ』

- (1) 序(なぜ歴史エッセイを書くのか) & 歴史は不変か? [9ページ]
- (2) 天才兄弟、頼朝と義経 [14ページ]
- (3) 桶狭間の戦いの深読み [7ページ]
- (4) 本能寺の変の謎に迫る [10ページ]
- (5) 長篠の戦を深読みする [11ページ]
- (6) 本能寺の変でもし織田信忠が逃げていれば [8ページ]
- (7) 紫式部はなぜ源氏物語が書けたのか(時代背景に迫る) [13ページ]
- (8) 歴史の激動期「幕末から明治へ」を考える [25ページ]
- (9) 忘れてはならない歴史、沖縄戦を考える [30ページ]
- (10) 山崎の戦いで明智光秀が勝利するには [20ページ]
- (11) 渋沢栄一の生き方 [27ページ]
- (12) 織田信長の天下取り [41ページ]
- (13) 太平洋戦争とは何だったのか? [38ページ]
- (14) 不思議將軍、徳川慶喜 [もうすぐ完成]

そこで、皆さんにお願いです。これら14編のうちご希望の編を読んでいただけないでしょうか？ 私としては、皆さんのご希望の高いものから出版社に持ち込む参考にしたいと考えています。読んでいただける方は、私宛のパソコンメール・アドレス宛てに、ご自分のパソコンからメールで、ご希望の番号を教えてください。折り返し返信で、ご希望の『池さんの歴史エッセイ』を添付してお送りします。ご協力をいただける方は何卒よろしくお願ひいたします。

なお、池田宛のパソコンメール・アドレスは [ikeyoshi.24@gmail.com](mailto:ikeyoshi.24@gmail.com)